

江戸の岡場所

非合法へ隠売女の世界

渡辺憲司



湯女、茶屋女、飯盛女、夜鷹…

ここに明らかに！

〈岡場所〉の

江戸遊女史研究の
第一人者がひもとく
本邦初の
岡場所入門の
決定版！

女性たちの実態

江戸の岡場所

非合法〈隠売女〉の世界

渡辺憲司

星海社

255



SEIKAISHA
SHINSHO

はじめに

吉原中心の遊郭史は、権力者側からの視点だ。吉原の豪華な遊びがなくなれば、世間はそれを遊里文化の衰退とよんだ。吉原の成立は、集権政治体制の一環であり、都市振興を第一義的に先行させた経済体制の結果である。それは商業主義の飛躍的拡大にともなう武士社会の道徳倫理の喪失にもつながった。

江戸外神田御成道の古本屋須藤由蔵が書き残した『藤岡屋日記』には、文政八年（一八二五）に旗本太田波之丞が一統が隠売女稼ぎに加担したと記されている。江戸文化の爛熟期とでもいうべき文化文政時代を支えたのは、階層下落に陥った武士たちに代わった庶民であった。

管理売春総帥の名を権力に与えられた吉原は、江戸文化の発信源とよばれ、小説・物語、浮世絵や歌舞伎の世界で華やかなスポットを浴び続けた。甘美な情緒や独特の文化に人々は幻惑された。ことに太夫とよばれた高位の遊女との交際は、高級社交場として多くの人

の憧憬の対象となった。

一方で、江戸の盛り場の至るところに根を張り庶民の支持を受け、独特の文化土壌を育んだのが、吉原以外の買売春地域〈岡場所〉である。岡場所は、庶民ことに町人階級の法に背く^{そむ}自立的覚悟の上に成り立っていた。その岡場所に対し、権力者と同調する者たちは蔑みの視線を向けた。岡場所の歴史は闇の遊里裏面史といっていいかもしれない。しかしそこに吉原を凌駕するかのとき文化的土壌が醸成されたことも事実である。

大正二年、江戸風俗研究の牽引者である朝倉無声は「岡場所研究」序説(注1)で、吉原研究の進展に比べて岡場所研究が遅れているとした上で、「一體江戸時代に於ける岡場所の全盛は、或る時期には吉原にも勝った程で、また其風俗や流行やが、江戸市民に影響をおよぼしたことは吉原のそれよりも遥かに深大であった」と、岡場所の重要性を述べる。

岡場所に息づいた悲惨な歴史と文化は、江戸趣味の好事家や江戸文化研究者たちの手によって紹介されて来たが、近年では、塚田孝氏・吉田伸之氏らを中心とした歴史研究者により、近世都市社会の構造的特質を踏まえた遊郭社会という包括的概念のもと、岡場所についても意欲的に言及され(注2)、女性史研究者の先進的論考も根底からの遊里史の見直しを行っている。二〇二〇年一〇月の国立歴史民俗博物館での企画展示「性^{ジェンダー}差の日本史」

の意欲的な取り組みも遊里史研究者に大きな刺激を与えた。それらの多くは吉原に向けられたものであるが、おそらく今後は岡場所にもさらに新たな視野が展開されるであろうことは疑いない。

それらの研究に対し十分な咀嚼を行っていないが、自分なりに岡場所研究入門書を書き、今までの研究の間隙を埋めることが出来ればと思った。

吉原を、遊里文化のメインカルチャーであるとする、岡場所はサブカルチャーでもある。本書は江戸時代の非公認の買売春地域である岡場所の歴史を視座の中核にすえたものである。許されざる世界、非合法の岡場所で生きた女性たちへの鎮魂の思いもある。

岡場所の中でも最下層の夜鷹とよばれた女性たちは、性病に罹患した悲惨な状況を作品に描かれ、世間から嘲笑を浴びせられたごくである。しかし、一方で彼女たちを主役とした作品も残り、戯作的反骨精神も生まれた。日本文学のうえで畸形的作品群ともいうべき洒落本史の嚆矢とされる『せきふ じんてん 跣婦人伝』（宝暦三年刊 一七五三）は、大衆からの吉原への挑戦状といってもいい作品である。葛飾北斎は「夜鷹図」で彼女たちの後姿に悲哀美を描き、喜多川歌麿は、吉原（花）と対峙して、岡場所「深川の雪」を描いた。

幕末、吉原の二倍の売上金を計上したという岡場所の雄深川に、江戸文化の精髓ともい

うべき「粹いきと婀娜あだ」といった美学が生まれたことはいままでもあるまい。

〈恋に上下無し〉と性の平等を囁うそぶいた神道家増穂残口ますほ ざんこうは、『艶道通鑑えんどうつうかん』（正徳五年刊 一七一五）で、吉原の太夫を桜に、岡場所最下層の隠売女惣嫁そうか（夜鷹）を紫陽花に喩えた。季節に遅れ路上にいつまでも枯れ残る紫陽花を残花と見るか残滓と見るか……。紫陽花は岡場所の女性たちに似ている。江戸時代の法律用語である隠売女（かくしばいじょ）「かくしばいた」などとよぶを、近代の倫理は淫いんらな淫売女いんばいと差別的な字をあてた。淫売の初出は、明治時代以降である。貧困故に悲惨な人生を歩む夜鷹を「不義にして義あり、不道にして道あり」と憐れんだのは、元禄期の色道の大成者藤本箕山きざんである。本書により岡場所の女性に石を投げた近代の倫理を照射する一步としたいとも思った。

別記…文書類および洒落本などの作品からの引用は出来るだけ、原文の味わいを残したが、一部漢字をあて読解に便宜を図った。振り仮名も現代仮名遣いで行ったものもある。原文からの引用は原則として「」に記し、大略を現代語に訳した部分は、へゝに記した。また適宜（ ）で注記した。また、原漢文の返り点、レ点などは、読み下して読みやすいように配慮した。

目次

はじめに
3

第一章 岡場所とは
17

岡場所の意味
18

公界の苦界
20

女郎
22

岡場所の定着
24

江戸文化の自立
27

岡場所遊里史
30

第二章

岡場所黙認の時代

33

遊郭設置の請願 34

人身売買倫理の退歩 37

人身海外流出への危機感 40

元吉原設置の認可 41

湯女の登場 42

鉾山の自由 45

「湯女図」の魅力 46

ゆれる湯女たち 50

闊歩する女たち 53

丹前勝山 55

ジェンダーフリー勝山 58

第三章 岡場所禁圧の時代 63

新吉原の成立 64

鉄砲洲の抗争と公娼保護 66

ケイドウ 68

『青楼年暦考』と茶立て女 73

『御町中御法度御穿鑿遊女諸事出入書留』 75

吉原内部崩壊 78

「売女御免之場所」 82

護国寺音羽町 83

第四章 岡場所活況の時代 その一 89

内藤新宿開発 90

内藤新宿廃駅 91

新宿夜話 95

内藤新宿再開 98

平秩東作 98

新宿モンパルナスの開花 102

洒落本『甲斐新話』 106

遊里と農民 111

新宿遊里散歩 114

第五章

岡場所活況の時代

その二 117

岡場所全盛前史 118

背景としての飢餓 120

打ちこわし 124

大名道具の花魁 126

売笑婦の数 130

第六章

深川雑考

157

岡場所はどこか
132

岡場所のリンクおよび「江戸遊里方角図」
133

岡場所一覧
138

夢の島の塵芥
158

門前町の形成
160

元禄頃の深川
162

庶民の町
164

世にも不思議な作品洒落本
167

『辰巳之園』自序
169

吉原との比較
172

意気地と達引
177

船宿から深川へ
181

船頭 183

中洲 188

深川に限る渡世 194

深川の子ども 196

切穴 200

かる子 203

深川のトランスジェンダー 207

「淫女皮肉論」——隠売女の反乱 211

遊女一揆の結末 217

天保の改革 220

第七章 遊里品川 225

行楽地品川宿 226

北の吉原南の品川 229

第八章

北関東の玄関千住

241

弾正日待 232

品川の客 235

品川散策 238

千住の人口 242

千住の隠売女 244

小塚原 247

遊女墓と過去帳 248

第九章

岡場所根津盛衰史

255

遊里根津 256

権現様のおかげ 256

大工客 259

公許根津遊郭 261

第十章 夜鷹哀史——岡場所壊滅 265

残酷お嬢吉三 266

苛酷な夜鷹 270

夜鷹醜悪図 276

夜鷹の意地 280

夜鷹の吉原批判 284

不死身の夜鷹 287

幕末岡場所の終焉 291

注
記
296

あとがき——「ふないし」の弁
300

地図／ジエオ

本書で引用した参考資料の中には現在では人権上不適切と思われる表現があります。これらは現在では使用すべきではありませんが、江戸時代には社会全体としてこのような言葉、表現が一般的に使われていました。差別助長の意図では使用しており、引用文は原文のままとしています。

（編集部）

第一章

岡場所とは



岡場所の意味

岡場所は、幕府公認、官許の吉原に対して吉原以外の非公認・黙認の遊里のすべてをいう。

品川・千住・内藤新宿・板橋の四宿は、準官許で飯盛女を置くことが許されたので、岡場所から除くといった考え方もあるが、そこにいた遊女の多くは、黙認の形が多く生活実態も岡場所と同様であったと考える場合が多い。本書でも、四宿は岡場所として扱った。

江戸の吉原以外、つまり吉原の外（ほか）・他（ほか）場所、岡目八目の岡と同じく局外の意である。上方では大坂新町・京島原を廓くわくわとよび、それ以外の遊里を「島」（江戸の岡場所）とよぶ。

傍（おか）、わきの意味から転じたという説もある。「かくれざと」「かくしまち」などといった言い方もある。川柳などでは、語調を合わせ「岡場」ともいう。「岡」と略しても使う。「外場所」といった表記もある。本稿では、遊女という呼称を、岡場所の女性たちにも用いているが、〈岡場所女郎〉といった言い方もよく使われる。幕府の公文書で常用されるのは、〈隠売女〉あるいは〈売女〉である。密娼という言い方もある。遊女を吉原に限って用い、岡場所は売女という表現を使うべきだという主張もある。

吉原の遊女を公娼といい、岡場所の女性たちを私娼とよぶ。

『深川新話』（安永八年刊 一七七九）には、「岡場所の公界くがいしらず」といった表現がある。岡場所の女性には世間の習慣を知らないというのだが、ここには〈公〉の世界を知らないという意味も含み、公的世界が岡場所を見下しているニュアンスがある。岡場所の遊女は、客から見ると吉原育ちの遊女のように、〈公界〉のしきたりをわきまえていない、つまり「世間知らず」などと呼ばれているのである。

『醒睡笑せいすいしょう』巻二（元和九年序 一六二三）には老父が息子に、「汝がやうなる公界知らずには、ちと仕付しつけを教へん」などといった語例もある。ここは世間知らずといった解釈で間違いはないのであるが、あらたまった「公的」な場所といったニュアンスも感じられる。同じく、『醒睡笑』巻一には、舅が婿に語る言葉で、「今までは公界むきのよし、この後は随ずいをいだいてあそばれ候へ」とある。この場合は、かたぐるしい生活からもっと気まま「気軽に」生活してよいという語例だ。公界の反意は、気まま、勝手にということにもなるようだ。

気まま、勝手は〈自由〉と言い換えられるかもしれない。もちろん、江戸時代に人権に対する思想的意識はない。明治以降の自由とはまったく異なった用語であることはいうま

でもない。しかし〈自由〉の語は、江戸時代から使われていた言葉である。『色道大鏡』巻十三（貞享五年以降成 一六八八）では、下関の遊女町稻荷町の動向に触れ、「公儀前傾城の数七十人とさだむ」として、天神らの遊女の値段付けを記した後で「寛文中までは、傾城の町へ出る事自由にして、問屋方にも宿せり。延宝より己来、是を制し給ひて、門外へ出さず」と記している。明暦三年（一六五七）における新吉原の成立が地方遊里にまでおよんだ一例であるが、ここでは「公儀」の制約によって彼女たちの外出の「自由」が失われたということに着目しておきたい。

公界の苦界（注3）

政治的管理〈法〉がおよぶ地域が「公界」であるのに対して、非管理地域つまり非合法的な〈気随な〉所が岡場所である。岡場所に通う遊客は、吉原の堅苦しい作法を嫌い、気ままに安直な岡場所に通った。吉原の遊女たちは、閉塞的束縛の下に置かれた苦海ならぬ公界の中で拘束を前提に生きていたのだ。

救いようのない貧困と被差別的扱いを受けた岡場所の女性たちは放逐された世界で地獄と背中合わせの自由の身であった。誤解を恐れずにいえば岡場所の女性たちは「自由な女」

であった。

国家の政治権力が、公式に管理する政策として置いた合法的娼婦の一般的呼称としての公娼に対して、許可を受けない非公認の娼婦が私娼である。吉原は江戸幕府が公認した公娼である。対して岡場所の女性たちは、私娼である。

登山をしたものであれば経験したことがあるであろう。営林署の管轄の林にまかれた立ち入り禁止の赤いテープを想像すればいい。戦前から警察は風俗営業を許される地域を赤く囲んでいたとも、Red-light districtが語源だともいう。いずれにしろ公的エリアが赤線地域である。合法的赤線と非合法的青線買春地帯へもぐりの集団売春地帯という対比でも説明がつくであろう。

鎌倉幕府が置いた「遊君別当」や室町幕府の「傾城局」などといった制度は実質的に公娼制度に近いものである。しかし、明治以前、江戸時代まで公娼・私娼という言い方は使われていない。

明治三十四年の論説「中流人士の風俗」と題した一文(注4)では、当代の淫蕩なる社会への批判を記し、「凡そ人を淫蕩に導くものは娼婦おや(此に娼婦と称するは一の公娼を指したるにあらざ、公私に論なく苟も賣淫いやくばいの所行あるもの者をいふ)の類なり」また「公娼の害は寧ろむし

私娼の害よりも薄し、蓋し公娼は検束甚だ厳なり是を以て其足戸庭より出づるを得ず、弦妓等の私娼は敢て検束する所なし」などとある。公娼・私娼は明治時代の中頃から一般的に使われていたようである。

ちなみに、娼妓・倡妓の語は、江戸時代後期から一般的に使われている。遊里語に漢語をあててその読みを羅列した『雑文穿袋』(安永八年刊 一七七九)には、遊女、女郎の漢語の異名として「倡妓ぎといふは女じ郎はやのことはや」時妓はや困妓こん村妓そんなど出てくる。『船頭深話発語』(文化二年成 一八〇五)にも、「娼街」に「いろまち」、「娼閣」に「ちやや」とし、「客は船也 娼婦は水也」として、娼婦に「じよらふ」のルビをふっている。遊女と客とのやり取りを、将棋の術語を用いて話をすすめる『娼妓絹籠』(寛政三年刊 一七九二)などといった山東京伝の作品もある。用法としては漢語的なニュアンスが強いやや硬い言い方で、明治に入ってから、公娼をさして「娼妓」という言い方が一般的であった。娼婦もほぼ同じような語史をたどっている。

女郎

上田秋成の『癩癖談くせものがたり上』(寛政三年頃成 一七九二)に「ある遊所の娼婦に、酌とらせて

あそびけり」などとあり、「遊所」に「いろざと」、「娼婦」に「おやま」とルビがある。「おやま」は、一般的に上方で使われるが、江戸でいう「じよろう」と同じ意味である。上方でも「京女郎」などといった言い方がされている。

『色道大鏡』第一名目抄では、「傾城も尊敬して見る物なれば、上^{じやうらう}藤といふべき處^{ところ}もあるか。しかはあれど大夫^(ママ)を上^{はしおんな}藤といひ、圍^い職^{しよく}以下を下^げ藤^{ろう}といはゞ、道理にかなふべけれど、端女^{ちやうなん}まで女郎^{ちやうらう}といひ来りぬれば、只^{ただ}傾城^{たうせう}の通称^{つうせう}として、女郎^{じやうらう}といはんはんに子細あるまじ」と述べている。女郎^{じやうらう}という言い方は、江戸時代初期に遊女を「上^{じやうらう}らう」と表現することも多く、女郎を「上^{じやうらう}藤」とは宮廷官女からいわれた言葉であるとの付会^ふ説^{かい}もあるが、下級な「上^{じやうらう}らう」の場合も多くあり一概にいけない。女郎は、一般的にはむしろ下級の遊女を指すことが多いようだ。『色道大鏡』のいうように、太夫より以下の遊女たち、例えば「端女^{はしじやうらう}郎」などといった言い方がよく使われる。「じよろう」(女郎)には、「ばいた」(売女)ほどではないが、やや差別的なニュアンスが強いことも事実である。「傾城」も同じ意味だが、下級の遊女を指していることはほとんどないようだ。同書には、傾城について、白拍子以来の名称として「抑^{そもく}當時の遊女を傾城といふ事、過分の称号なれども、用い来ればちからなき事也」と、身に余る上等の表現であるとしている。また遊女については、「船路の旅人に愛

せられる故」の語であるとし、室津の遊女をその始まりとし、限定的な意味では用いていない。曖昧な表現ではあるが、本書では、特に説明を要しない場合は遊女ということばを、売春を職とする広い意味で用いている。英語で遊女を「wandering girl」などと訳す場合があるが、ちよつとニュアンスが違う。「prostitute」の街娼の方が「遊女」「女郎」に感じが近い。傾城、上臈は「courtesan」の訳語が適當であろう。

岡場所の定着

「岡場所」という言い方が使われたのはいつからであろうか。『風俗八色談』ふうぞくはっしきだん（宝暦六年刊一七五六）「妙音尼が物語の事」では、名妓高尾の言を借りて吉原の下卑た現状を批判し、「言葉遣も吉原と踊おどりこ子と岡場所といりまじり、半分づゝ物をいふを粹すいと覺へ、座つきころばへまで野鄙やひに成しなり」とある。吉原の美意識は衰退し、吉原優先などという価値観が薄らいできていることをこの会話は示している。また、同書「夢中色談の事」には、「五町にも実まことの遊女といふは指を折て三人四人とはない。岡場所陰間かげまのたぐひは、目を留とむる者に非あらずと高くとまり」などとある。享保年中に既に「岡の遊女屋」の用例（81頁参照）があるが、宝暦期には、吉原対岡場所という対比は、用語面でも確定的になったのである。

平賀源内（風来山人）の傑作『根南志具佐』前編（宝暦十三年成 一七六三）には、忍びの者である蝦が海の竜王の命令で正月の盛り場めぐりする光景に、「元日より人間にまじはり、諸寄合・無尽会・吉原・堺町・岡場所を初め、兎角向ふへ廻りたがり、年の暮れの浅草市まで年中人にすれるが役目」といった記述に明記され、この頃から江戸の私娼街が増加繁昌したことがわかる。

以上の用例は、一八世紀中ごろ、宝暦年間に、岡場所が〈非公認〉の遊里として世間一般の人々によって、はっきりと認知されてきたことを示している。江戸唯一の公認遊郭である吉原と肩を並べる、もしくは吉原に対抗する遊里として認められたということだ。幕府が認めなくても、江戸の人々（あえて民衆とよばせてもらおうと）、〈民衆〉が岡場所の存在を認知したのである。

宝暦七年（一七五七）から同十三年までの川柳句を集めて出版された明和二年（一七六五）刊の『俳風柳多留 初篇』には、次のような句がある（以下、成立年代の異なるものも雑俳と総称）。

岡場所はくらはせるのがいとま乞い

帰る時には、吉原ならばきぬぎぬの別れなどと情緒もあるであろうが、岡場所は「くらはせる」、客の背中をドンとどやしつけるといった意味であろう。岡場所のすげなさをよんだものだ。

岡場所は遣り手と女房どんぐるみ

「どんぐるみ」は、一緒に区別がつかないこと。吉原では遣り手が管理の役割として独立しているのに、岡場所では店の経営者の女房が兼ねているというのだ。

岡場所かむろで禿かむろといへば逃げて行く

前の句と同じような句。岡場所では禿かむろなどといった役割でよばれることはないのであろう。遣り手も禿も吉原の高級遊女の付け人である。

江戸文化の自立

一八世紀の中頃、一七五一年から始まる宝暦年間に、何故「岡場所」の存在が認知されたのであろう。江戸の文化の様相はこの頃変化をきたしていた。

江戸時代の文化には、井原西鶴、松尾芭蕉、近松門左衛門らを輩出した元禄文化と曲亭馬琴・鶴屋南北らを中心とする文化文政文化の二頂点があったと考える（二こぶラクダ説）がある。一方で、中野三敏氏のごとく、二こぶの谷間にある享保・宝暦の時代を中心に一八世紀の文化を重視するへひとこぶラクダ説の文化史家も多い。

小説史を見ると、洒落本・黄表紙といった大衆文化が隆盛期を迎えていったのは、宝暦期からである。それは多く宝暦元年（一七五一）から始まる田沼意次の政治体制と重なる。田沼時代は、ほぼ三十五年続き、松平定信の寛政の改革による儉約、風俗取り締まりの緊縮政策に代わっていく。田沼の時代は、賄賂が横行したとか、不正が行われたといった面が強調されているが、一方で蝦夷地の開拓をはじめ積極的な解放政策がとられた闊達な時代でもあった。

それは、一七世紀後半の元禄時代までの大坂・京都を中心とする上方文化を脱却し、江戸の大衆を主客とする新たな〈江戸文化〉の到来を示すものであった。寺子屋がそれ以前

に比べて格段に増加するのも宝暦期からだ。既に享保七年（一七二二）には、江戸府内で寺子屋総数は八〇〇を超えた。江戸の大衆は、着実に自立性を高めていったのである。

一七世紀の中ごろまで、江戸は上方の植民都市であったといっても過言ではない。「江戸店持ちの上方商人」という言葉がある。江戸の経済は、京、大坂、近江、伊勢の有力商人に牛耳られていたのである。出版機構でも、上方の本屋が力を握り、江戸の芝居の役者評判記でさえも、上方から送られてきたのである。浮世草子（八文字屋本）も江戸町人には、「下り本」として迎えられた。上方相撲で幕下でも、江戸では看板だけで大関を張ることが出来たともいう。

しかし、一方で、享保期（一七一六）に入ると、上方の義太夫節にかわる河東節・豊後節ぶしが江戸で発生し、さらに派生した常磐津節・富本節・新内節などが、元文（一七三六）から宝暦（一七五一）にかけて、吉原のみならず江戸の巷に広く、岡場所を中心に流行していったのである。江戸言葉が、粗野な方言的性格を払拭しながら、洗練された都会語としての性格を有してきたのもこの頃である。上方からの「下りもの」は、大江戸圏の拡張により成長した地場産業によって敗者となった。「下らないもの」が江戸を席卷したのである。

一八世紀、人口も大幅に拡大し江戸はその姿を定着させて都市としての完成形を見せたのである。

江戸が、上方から都市としての自立を始めた時期、岡場所も吉原と肩を並べる〈性産業〉としての位置を占めたのである。京、島原の遊郭が、江戸吉原の根源だなどという話は過去のものとなったのだ。

田沼時代の政策は、四宿をはじめ岡場所に対して寛容であった。このため市中には、岡場所が急増する。岡場所は、急激に伸長した各所の盛り場と結びついた。

江戸の積極的な行動文化が巷を活発化したのである。その結果この時代を頂点として生み出されたのが岡場所である。

吉原の成立は、伝統的上方意識の凝固したものであるが、江戸は都市として成長するごとに新たな皮衣に包まれていったのである。岡場所は、江戸が脱皮していった新たな性の娯楽空間であった。

以下は、一八世紀の江戸の文化隆盛に伴う岡場所に基軸を置いて遊郭史の時代区分を試みたものである。本書であつかうキーワードとなる各時代の特徴も羅列した。今まで見えにくかった岡場所中心の時代相を浮き出しうるのではないかと思う。

岡場所遊里史

(一) 岡場所黙認の時代

都市江戸の開発と元吉原の成立〈江戸黎明期〉

天正・文禄・慶長・元和・寛永等の時代

一六世紀後半から一七世紀前半まで約七十年間

天正十八年（一五九〇）の徳川家康江戸入り、散娼から集娼への進展、元和三年（一六二七）の元吉原設置、湯女の活況

(二) 岡場所禁圧の時代

江戸の成長期と新吉原への移設〈江戸発展期〉

明暦・万治・寛文・天和・元禄・正徳等の時代

一七世紀後半から一八世紀初頭まで約六十年間

幕藩体制の確立と新吉原の隆盛、明暦三年（一六五七）新吉原の開設、元禄（一六八八）一七〇三）文化の盛行

（三）岡場所活況の時代

江戸文化の成熟期と新吉原の衰退（江戸成熟期）

享保・宝暦・明和・天明等の時代

一八世紀初頭から一八世紀末まで約七十年間

都市文化の隆盛と文芸の浸透、徳川吉宗の改革と田沼の積極政治

遊里文学（洒落本）の進展、風俗文化の活況

（四）岡場所壊滅と放縦の幕末の時代

寛政・天保の改革、寛政・文化・文政・天保・安政・慶応等の時代

一八世紀末から一九世紀後半の明治維新までの約八十年間

松平定信の緊縮政治、文化文政の文化の興隆、水野忠邦の風俗文化への強圧・幕末の混乱と風俗文化の混迷・頹廢

以上は、渡辺の提示した時代区分とキーワードであるが、上林豊明「売笑史雑考」（『新小説』大正十五年九月号）・宮川曼魚『江戸売笑記』（批評社 昭和二年）・竹内勝『日本遊女

考』（クリエイイト社 昭和四十五年）などにおいては、岡場所の存在を重視した遊女史の展開がみられることを注記しておく。

私は宝暦期を中心とした一八世紀を江戸の岡場所文化の最盛期ととらえ、〈黙認〉↓〈禁圧〉↓〈活況〉↓〈壊滅と放縦〉という見方で考えてみた。これは、フランスの社会思想家オーティスが、『中世社会の娼婦』（シカゴ大学出版 一九八五年）の遊里史の分類概念を参照したものでもある。

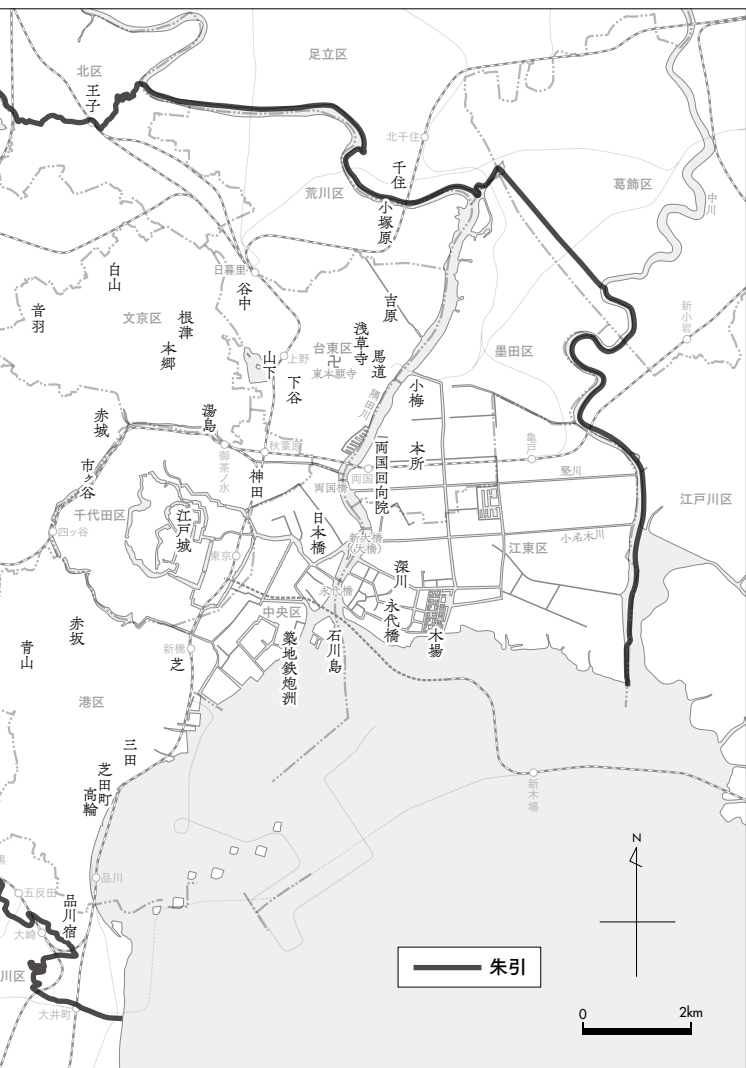


図4 江戸の主な岡場所 作図/ジェオ



図5 遊里方角図(『契国策』より)
所蔵：著者蔵本

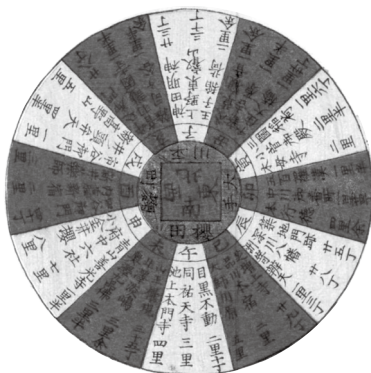


図6 江戸方角図(江戸切絵図「日本橋北内神田両国浜町明細絵図」より)
所蔵：著者蔵本



岡場所一覽

深川方面

● 仲町^{なかつまち}㊦（永代寺門前町）因『上品下』

深川随一の評価だが、無作法また夜具なども粗末という。『蛛』に「一切十二匁」。『色里』に「開帳十式匁」。

「天明二年（一七八二）刊『登美賀遠佳』・天明二年序『富賀川拝見』・寛政三年（一七九二）刊『仕懸文庫』・寛政十一年（一七九九）刊『仲街艶談』」など。

● 新地㊦（大新地）（築立新地）（越中島築立）因『中品中』

仲町に次ぎ繁昌。見晴らしのよさ深川一。天明七年吉原火事の仮宅出来。大柴楼棧橋の図が天保九年（一八三八）刊『春色英対暖語』にある。『蛛』に「一切二朱」。『色里』に「開帳金二朱」。

● 小新地（四六見世）（築立付近）因

文化文政の新開地。

● 表櫓^⑧（櫓下）（永代寺門前山本町、火の見櫓下、南側）因『中品上』

美形多いと評判。『蛛』に「一切二朱」。『色里』に「開帳金二朱」。

●「寛政二年（一七九〇）刊『面美多通身』・安永八年（一七七九）刊『美地の蠣殻』など。
裏櫓〈横櫓〉（永代寺門前西河岸、火の見櫓下、北側）因『中品上』

『蛛』に「一切二朱」。

●「安永八年（一七七九）刊『深川新話』・天明五年（一七八五）刊『深川手習草紙』など。
裾継（永代寺門前北河岸）因『中品上』

以上表櫓、裏櫓とあわせて三櫓ともいう。『蛛』に「一切二朱」。

「寛政十二年（一八〇〇）刊『疇夕の茶唐』」

●石場⑥〈古石場〉〈越中島〉〈石置場〉（越中島武家拝領地）因『中品中』

延享三年（一七四六）頃より起こる。『蛛』に「一切二朱」。『色里』に「開帳金二朱」。

「寛政十年（一七九八）刊『辰巳婦言』・文化三年（一八〇六）刊『船頭深話』」など。

●新石場（越中島続拝領地）因『中品中』

天明三年頃より。『蛛』に「一切二朱」。

●佃⑦〈向土橋〉〈佃新地〉〈海手〉〈洗濯島〉〈あひる〉（蓬萊橋を渡ると佃町）因『中品中』

売価二百文をガア、四百でガアガアであひるとも。太った遊女がその姿アヒルに似ていたなど諸説ある。昼六百文、夜四百文、四六店ともいう。『色里』に「御初尾四百文」。

●網打場〈松村町〉（黒江橋の裾、松村町）因『下品中』

朝鮮矢来（竹組）で囲まれていた。文化十四年（一八一七）刊『ごしきいたこあだなつれがし五色潮来艶合奏』に「網打場切見世総仕舞之図」あり、絵中の張り紙に「つばねみせへだてのからかみをはづして三げん惣仕舞うちまじき酒もり」とある。内部の様子が描かれる。船頭の客が多い。『蛛』に「四六」。『色里』に「蠟燭代百文」。

●常盤町（小名木川北岸、高橋北詰）因

文政年間焼失。

●御旅おたひ（御船蔵前町、深川八幡御旅所前）因『中品中』

●安宅あたけ（安宅長屋）（御船蔵前町南側）寛『下品中』

●入船町いりふね（汐見橋東洲崎）寛『中品下』

寛政三年津波で消失。

●三十三間堂さんじさんかんだう（八幡社東三十三間堂町、京都三十三間堂を移す）寛『中品下』

宝暦頃ケイドウの際船に乗って七八人が砂村へ逃れたという。『蛛』に「四六」。

●土橋どはし（東仲町、二の鳥居より東）（永代寺門前東仲町）寛『上品下』

仲町と伯仲。文化の頃（一八〇四）まで盛ん、文政期（一八一八）には衰微す。『蛛』

に「十奴二朱」。『色里』に「金貳朱」。

『天明四年刊』『二日酔^{ふつか よいおさかずき}卮^し』・寛政、享和頃成^い『意妓^いの口^{くち}』・享和元年（一八〇一）刊『嘉^か和美^{わび}多里^{たり}』・享和二年（一八〇三）刊『富^{とみ}岡八幡鐘^{おかわけかね}』

●直助屋敷[㊦]〈三角屋敷〉（深川富久町、萬年町三丁目）寛『下品中』

直助は、赤穂浪士で町医者となり黄金をため、不忠者とよばれた小山田庄左衛門の下僕直助（主人小山田を討ち人気が出たという）の名からという。『蛛』に「四六」。

●夷^ゐの掘^ほ〈船鰻頭・お千代船〉（扇橋より横十間川南河岸）寛『下品下』

船鰻頭の巣窟、夜鷹の二十四文よりやや高く大抵三十二文、幕末嘉永の頃には深川蓬萊橋付近にも多く有り。

●新六軒（深川六間堀町か）寛

●六間堀〈大橋六間堀〉（六間堀町）寛『下品上』

●新大橋東詰（元町、御粃蔵付近）寛『中品中』

『蛛』に「びくに、切二百、下は百、とまり二朱」。

●新大橋袂『類拔』

『蛛』に「此外船まんどゆうとて深川吉永町に軒をつらねたるもの、夜に入れば、船に

一人づつのせて所々川岸あるひは高瀬舟に色を売る」とあり、「百、下なるは五十」と注記。

本所方面

●弁天前(實)へ一つ目弁天・山猫・猫茶屋(本所一つ目堅川の入り口、八郎兵衛屋敷)因『上品中』高笑い、大声を禁じ、穏便なる遊び場という。『書留』宝永二年十一月に記事有り。岡場所中第一高価。なじみ客のみ受け他大金出すとも謝絶という。御殿女中めきたりとも。「ねこをやく女房も疊たゝくなり」ここでは二階から遊女をよぶのに手をたたかず、疊をたたくという。『蛛』に「弁天金猫一分」。

『天明元年(一七七二)刊』『にやんのことだ』・天明八年(一七八八)刊『二目土堤』ひとめつつみ

●松井町(本所堅川の南側、松井町二丁目辺り)因

寛政の改革後、回向院前の娼家が移る。『書留』宝永二年十一月に記事有り。

「おちぶれた吉田も元は松井町」夜鷹も元は格上の松井町にいた。『色里』に「銀式朱」。

●入江町(五)〈鐘撞堂、本所四軒、鐘の下〉(本所入江町鐘撞堂の北)因『下品下』

「つきがねの下でして居るけちなやつ」。『暦考』寛文八年三月に記事有。『好色一代男』

卷二の記事「本庄の三つ目の橋筋」は、ここか。『蛛』に「四六」。

「安永年間（一七七二〜八一）刊『奴通』やつつう」

●六尺長屋〈六尺屋敷〉（入江町鐘屋敷のそば）因

●吉岡町（法恩寺橋南側、吉岡町に近接）因『下品下』

●吉田町丑（本所横川西の通り、吉岡町の東）因『下品下』

鮫ヶ谷と並んで夜鷹の巢窟。『色里』に「材木のかげへ寝ござのやす物をかつた　しま
いは鼻がふぎや／＼」「御散錢二十四銅」。

●本所おおしも大下〈三笠町〉（長崎橋西に、北側）因

●大徳院前（両国橋東詰、南本所）寛

●回向院前丑〈土手側、銀猫〉（両国回向院前の土手）寛『上品中』

天明の頃吉原の仮宅。比較的しめやかな遊びであったという。「回向院涅槃にねこも見
へるなり」「御膝脇金銀の猫居た所」。『蛛』に「二朱」。

●六間（回向院土手側）寛

「安永四年（一七七五）刊『青楼楽種』たのしみぐさ」

●堂前④〈三十三間堂前〉（浅草新堀端龍光寺門前）〔天〕『下品中』

深川に三十三間堂が移った後も堂前とよばれた。切見世では上品、美玉揃いとも。『蛛』に「切みせ」。

●朝鮮長屋⑤〈浅草六尺屋敷〉（門跡前東町）〔寛〕『下品上』

朝鮮来朝使節の宿舎が近くの東本願寺にあったことによる。『蛛』に「切みせ」。

●浅草広小路（浅草寺門前を西田原町から東吾妻橋に至る大道）〔寛〕

●浅草駒形町〈並木町〉（浅草駒形堂付近）〔寛〕

●同田原町三丁目〈紙漉町〉（東本願寺の東門前の通り）〔寛〕

●三好町（浅草御厩河岸の渡し付近）〔寛〕

●金龍寺前〈地獄〉（門跡東方）〔寛〕（浅草門跡前、周辺の総称）

『花知留佐登』に「一ト切金一分」。「素人多く内々に転ぶ故に地獄とも云う」。

●三島門前③〈丸太〉（三島西蔵院前、金龍寺門前の向側）〔寛〕『類拔』

マルタなどによぶ賤娼が出没。『蛛』に「びくに、泊り二朱、切二百」。すぐに転ぶダルマを逆読みしてマルタ。

● 浅草新寺町〈広徳寺前〉（広徳寺前から浅草門跡橋までの大通りか）〔寛〕『中品中』

● 門跡前〔亥〕（門跡は東本願寺、その表門一帯）

『遊里の花』に上上。

● どぶ店〔亥〕（浅草永住町の一部）〔寛〕『下品中』

長遠寺はどぶ店のお祖師様とよばれる。

● 柳の下〈柳稻荷横町〉（浅草寺町通大乘院門前、万福寺前とほぼ同じ）〔寛〕『中品中』

● 万福寺門前〔亥〕（浅草南松山町）〔寛〕『下品上』

「ふぐ汁やあたればまゝの万福寺」などとある。

● 馬道〔子〕（浅草寺東境の通路）〔寛〕『上品上』

明暦の頃、吉原通いの遊客が馬に乗ってこの地を通ったことによるとも。髪風も素人娘風で騒ぎもならず静かなところであつたという。『遊里の花』も上上の位を与える。地味な隠れ場所か。『蛛』に「二朱ト十奴」。

● 智楽院門前（浅草寺中智楽院）〔寛〕

早くに無くなったものか。

● 新鳥越（浅草待乳山の西麓、聖天町から北へ山谷まで）〔寛〕

『遊里の花』に「上」。

谷中、根津辺

●廣徳寺前㊟(下谷稻荷前)

●いろは(谷中)㊟(谷中天王寺門前茶屋町) 因『中品下』

昔茶屋が四七軒あったことから「いろは」などと呼称。「玉だれの内はおかしきいろは茶屋」いろははすだれ囲い。「いろは茶屋客をねだつて富を付け」近くの感応寺は富くじの場。「いろは茶屋かさ守り近く気にかかり」近くに笠森(瘡守)稻荷。『蛛』に「二朱」。『色里』に「御初尾五百文」。『花知留佐登』には「至つて、一切に美にしてよき所也」。

●根津宮永町㊟(根津権現門外) 因『中品下』

本書第九章参照

●根津門前町(根津権現門内) 因『中品下』

本書第九章参照

音羽、赤城辺

● 音羽④（護国寺前の直路周辺）因『中品下』

本書第三章護国寺音羽町参照。『蛛』に「二朱」。『色里』に「御初尾銀式朱」。

● 音羽裏町〈腕づく長屋〉（音羽七、八丁目の西裏）因『下品上』

● 音羽鼠坂（音羽四丁目と五丁目の中間から護国寺に向かって右を上る坂）寛『下品下』

● 音羽新長屋（音羽九丁目西裏）因

● 行元寺門前〈山猫〉（神楽坂を牛込御門から上がり右）寛『中品上』

後に行願寺と称す。『花知留佐登』に「銀七匁五分」。

● 赤城〈山猫〉④（牛込赤城明神付近、等覚寺門前）寛『上品下』

『花知留佐登』に「金壺分」。

市ヶ谷、四谷辺

● ぢく谷〈市ヶ谷〉④（市ヶ谷谷町周辺）因『下品下』

『蛛』に「大久保じくく谷」とあり「切みせ」。『色里』に「蠟燭代百銅」。

● 鮫ヶ谷〈鮫ヶ橋〉（四ツ谷谷町と南伊賀町の間）因『下品中』

本所吉田町と同じく夜鷹の巢窟。本書第十章参照。「折助の抜身の韜は鮫ヶ橋」武家の最下層の下男が客。『書留』元禄十五年五月に記事有り。『蛛』に「切みせ」。『色里』に「蠟燭代百銅」。

●市ヶ谷八幡前④〈茶ノ木稲荷〉（市ヶ谷御門を南に見たところ、市ヶ谷八幡社）寛『中品中』

『蛛』に「二朱」。『色里』に「蠟燭代百銅」。

●愛敬稲荷前〈お辰稲荷〉④（市ヶ谷八幡町に続く田町二丁目愛敬稲荷）寛『中品下』
醜婦が縁組を求める神とも。四六見世。

赤坂、麻布、青山周辺

●麦飯〈赤坂田町・赤坂〉（赤坂田町五丁目桐畑辺り）因『中品下』『下品上』

『婦美車』で二ヶ所に評価が出るのは、大見世と切売りの店が同じ地域に同居していた故。一時、深川に次ぐ岡場所としてにぎわう。吉原・深川を米飯とし赤坂田町を麦飯としたとも。大見世では悪しき風俗の者をあげず、切見世は卑陋と。「麦飯の近所御江戸の喰違ひ」江戸城喰違門近く。『蛛』に「二朱」。大見世の値。『色里』に「蠟燭代百文」（切見世）。

● 氷川⑦〈赤坂氷川〉（赤坂氷川神社前）〔寛〕『上品下』

天明の頃取り払い。『遊里の花』でも「上上吉」と評価が高い。一時期には深川仲町・土橋に次ぐとされた。『蛛』に「二朱に十匁」。

● 市兵衛町⑦（今井台町、麻布市兵衛町）〔因〕『下品上』

天和の頃より有り。古い遊里。『蛛』に「切みせ」。『色里』は「蠟燭代百文」。

● 藪下⑦（麻布鳥居坂下一本松通り）〔因〕『中品下』『下品中』

『婦美車』二ヶ所に出る。麻布宮村町、同宗英屋敷、同貞喜屋敷、以上三ヶ所の俗称。

『花知留佐登』に「銭なんぼうでも遊ぶよふなる所」とある。『色里』は「蠟燭代百文」。

● 高稲荷前⑦〈世継稲荷〉（麻布永坂町の高稲荷社（石段稲荷）前）〔寛〕『下品中』

● 青山⑦（青山新町）〔寛〕

『花知留佐登』に「五十文より客を呼」。

芝
辺

● 神明前⑦（芝神明社地内）〔寛〕『中品上』

芝神明は、両国広小路・浅草奥山と並ぶ繁華街。生姜市で有名。『蛛』に「二朱、かげ

まもあり」。

●三田同朋町㊦（三田二丁目東側、聖坂脇）寛『中品中』『下品リ』

『婦美車』二ヶ所に出る。『花知留佐登』に「夜昼四ツ切れて、一切六百文づゝより、此外に五百文、七百年有之しが、女風俗至てよろしからず」。

●三角〈三田新地〉（芝田町二丁目裏）寛『中品下』

寿命院上り屋敷、薩摩屋敷と背中合わせ。「三角は丸と四角客をとり」丸は増上寺の僧、四角は武士。『蛛』に「二朱」。『色里』に「御初尾式朱」。

●稻荷堂（芝横新町五光稻荷付近）寛

●赤羽根㊦（増上寺の後ろの新堀を赤羽根川、それを飯倉から四国町へ渡る橋）寛

『蛛』に「二朱」。

●高輪〈七軒〉（高輪大木戸の辺、芝九丁目続き）寛

「高輪へ仏の姿置いて行く」僧侶はここで着替えて品川へ。『蛛』に「二朱」。

●根芋〈車町〉（芝車町、芝田町九丁目と牛町の間）寛

●牛町（芝車町）寛

『蛛』に「切みせ」。

日本橋、大橋辺

● 蒟蒻島^{こんやく} 島^の 〔靈岸島新地〕（靈岸島富島町一丁目）〔寛〕『中品中』（靈岸島築立新地）

靈岸橋際埋め立て地、築立新地。埋め立てが安永二年（一七七三）に完成し遊里が出来る。廃絶後、蝦夷会所出来るも後に町屋となる。『蛛』に「蒟蒻島は横堀を埋たるなれば、ありくに、地ブルく振ひ動く故に号けたる也」とあり「二朱」。

〔安永四年（一七七五）刊『寸南破良意^{すなはらい}』〕

● あさり河岸〔大富町・京橋河岸〕（南八丁堀続き大富町、銀座一丁目）〔寛〕

● 中洲^{なかす} 〔三股〕〔寛〕

本書第六章「中洲」参照。

〔安永六年（一七七五）刊『中洲雀^{なかす}』・安永八年（一七七九）刊『大抵御覧^{たいでいごらん}』・寛政元年（一七八九）刊『中洲の花実^{はなみ}』など。〕

● 新大橋（新大橋西詰）〔寛〕

船比丘尼・船饅頭（船上売春婦）のたまり場

● 永久橋（蠣殻町から箱崎川にかかる）

「うつろ船永久橋へせりにでる」うつろ船は船饅頭（お千代）。価三十二文とも。

●鉄砲洲

本書第三章「鉄砲洲の抗争と公娼保護」参照

神田辺

●多町へめつた町（神田鍋町西裏）寛

歌比丘尼の巢窟。「比丘尼だけ精進物の中に住み」多町には青物市（精進もの）があった。

上野、本郷辺

●山下（佛店・けころ）（上野山下、広小路付近）寛『中品中』

「ころび芸者の転寝して枕席にはべる」故の名とも。近辺に仏具店が多くあった故に佛店とも。「前だれで手をふきながら四百とり」前垂れは茶くみ女の風。「山下はどちらを見てもよりなんし」山下の大通りまで広範囲に岡場所。最盛期には『山下稽古路居所名家数』によれば一〇七軒。「諸色高直けころでは水を出し」と天明七年（一七八七）の句、災害続き物価高騰、見世では酒ならぬ水を出したという。『蛛』に「切二百、泊りは客

より酒食をまかなひ、夜四つより二朱なり」と記す。『遊里の花』に「上上」。

『天明二年（一七八二）刊『山下珍作』』

● **大根畑**⑨〈千坪・本郷新町屋〉（湯島新花町、靈雲寺横）〔寛〕『中品中』『下品上』

「大根を引いたる跡でもんしもし」。『蛛』に「切みせ」。四六見世。

「安永年間（一七七二～一七八二）刊『喜夜来大根』〔奴通〕の解題本、序・本文の地名のみ変更」

● **新大根畑**〈新畑〉（湯島切通片町）〔寛〕

切見世。

● **丸山**⑩〈菊坂〉（本郷菊坂から北、追分町片町まで）〔寛〕『下品中』

天明年間喧嘩大騒動で闕所。

● **桜木町**（上野桜木町）

天保十二年（一八四二）、武家方中間口論にて廃止。上野桜木町の名前がついたのは、明治四、五年頃か。小石川にも桜木町の名がある。『かくれざと』所収は音羽九丁目の次に出る。

● **妻恋**（妻恋神社近く）

『面美多通身』に「妻恋へはじめてさ」とある。

白山辺

●白山西〈駒込〉（小石川白山権現の裏手）〔寛〕

●世尊院前⑥〈千駄木〉（本郷駒込世尊院門前）〔寛〕『中品下』『下品下』

品川辺

●北品川⑤『上品中』南品川『下品上』歩行品川

本書第七章参照。

〔安永二年（一七七三）刊『南閨雑話』・安永九年（一七八〇）頃刊『南客先生文集』・天明元年（一七八一）刊『新吾左出放題盲牛』・明和七年（一七七〇）刊『南江駅話』・寛政十一年（一七九九）刊『品川楊枝』・寛政十二年（一八〇〇）刊『南門鼠』など。

●鈴ヶ森（品川の南方、刑場の近く、八幡宮付近）『下品下』

千住 辺

● 大千住 小塚原^子

本書第八章参照。

板橋 辺

● 板橋^西（上宿「板橋区本町」・中宿「板橋区仲宿」・平尾宿「板橋区一・三丁目」）からなる。『中品下』

宝暦三年（一七五三）飯盛女の設置が認められる。音羽を真似るが田舎風。文政十二年（一八二九）頃成立の『我衣』には博徒、盗賊なども多いと。「板橋と聞いて迎ひは二人へり」とは、品川程にうまいものもなく、送迎の人もない。「板橋へ大根の金を入れなくし」とは、客が練馬などの周辺農民であったことを示す。『色里』には「御初尾五百文」とある。文殊院に遊女墓。新藤楼の門が板橋区立郷土館の庭に移築。

新宿 辺

● 内藤新宿^宋（西国）

本書第四章参照。

〔安永六年（一七七七）刊『売花新駅』・安永八年（一七七九）頃刊『駅舎三友』・天明四年（一七八四）刊『角鶏卵』など。
ばいか しんえき
かくたまご

●高井戸（甲州街道、内藤新宿より二里）寛

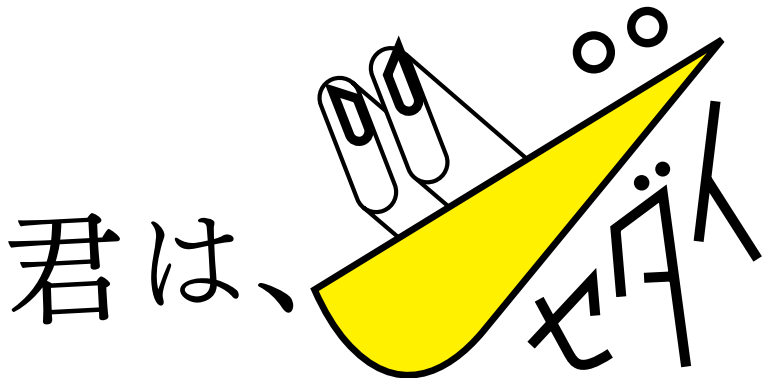
麴町辺

●麴町八丁目、大橋之内柳町辺、鎌倉河岸附近

これらは元吉原開設以前の遊里。本書第二章「遊郭設置の請願」参照。

番外・男色（陰間茶屋）の岡場所

宝暦・明和までは、平河天神前（糺天神）・赤城社地・英町（酉神田花房町）・市ヶ谷八幡前・本所回向院前など、後には、芳町・湯島天神地（酉）・芝神明門前・八丁堀代地（神田塗師町）。



何と闘うか？
<https://ji-sedai.jp>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、
行動機会提案サイトです。読む→考える→行
動する。このサイクルを、困難な時代にあっ
ても前向きに自分の人生を切り開いていこう
とする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ

ジセダイイベント

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月
開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

ジセダイ総研

若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。
「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

星海社新書試し読み

既刊・新刊を含む、
すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!